



サロゲイト

- 1986年度大鐘賞・撮影賞・照明賞受賞
- 1987年度ヴェネチア映画祭・最優秀主演女優賞受賞
- 1987年度アジア太平洋映画祭・最優秀作品賞・監督賞・助演女優賞（ハダシ）受賞
- カンヌ映画祭・インクソン・ハンウジン・ハンイ・ユンヤク
- 製作・チルドレン・監督・イム・クン・テク・脚本・クン・ヒョク
- 音楽・シン・ヒョク・新韓映画会社制作・1986年・韓国映画
- 協力・クラフトハウス・アジア映画社・配給・ヘルト・エー・

愛の速度に追いつけない。

韓国の溝口健二イム・クン・テク林權澤監督の映像哀詩。

SURROGATE
WOMAN

サロゲイト



カン・スヨン/イ・グスン/パン・フィ
製作:チヨン・ドファン
監督:イム・グオンテック/脚本:ソン・ギルハン

シバジ

1986年/韓国映画
協力:クラフトハウス/アジア映画社
配給:ヘラルド・エース/日本ヘラルド映画

**1986年度大鐘賞(撮影賞・照明賞)受賞 ● 1987年度ヴェネツィア映画祭最優秀主演女優賞受賞
1987年度アジア太平洋映画祭(最優秀作品賞・監督賞・助演女優賞(パン・フィ))受賞**

●シバジとは……

今から200年ほど前の李氏朝鮮時代末期。当時は祖先の霊が生きている者よりも尊ばれ、男たちが代々その霊を祭る儀式を行っていた。

この時代にシバジは実在した。「シバジ」を日本語に訳すと代理母となる。子供、つまり祖霊崇拝を引き継ぐ男の子に恵まれない夫婦の代わりに、その夫と交合して子を産み、その子供と引き換えに金や土地を受け取って生きてゆく女たちである。シバジは、男の子を産めば高い報酬を得られるが、女の子を産むと報酬は低くなり、産んだ子を連れて帰らなければならない。そして付け加えるなら……シバジは世襲制であった。シバジの子は、遅かれ早かれシバジとなる運命にあったのだ。

シバジたちは、世間で堂々とできる仕事ではなかったため、人里離れた村でひっそりと暮らしていた。対照的に、シバジのおかげで家系が途絶えてしまう恐れも、祖先の霊を祭る後継ぎの心配もなくなった人たちは、大きな屋敷でなに不自由なく暮らしていった。両者の間には、常にもの悲しい運命が存在する。

●「自分の体以外、石ころ一つにも情を移しちゃいけないよ」

シバジたちの住む山奥の貧しい村、陰門谷。おてんば娘のオンニョは、母親と二人で貧しいながらもこの村で楽しく暮らしていた。そこへある日、両班(地方名主)のシン家から、シバジ依頼の使いがやって来る。オンニョは、初めての依頼を受け、シバジとなる儀式を終えて村を出た。

シン・サンギョとの交合の日。初対面で愛のない交合をした二人

だった。が、それはやがて身分の違いを超え、互いを求めあうようになる。屋敷の人間の目を盗んでは、激しく愛し合うサンギョとオンニョ。やがてオンニョは妊娠、愛する人の子を身ごもる。しかし、その喜びも長くは続かなかった…。

●監督イム・グオンテックとアジアのNo.1女優カン・スヨンが絶妙のコンビで描く李朝絵巻

「非情城市」(台湾)「菊豆」(日中合作)など、アジア映画が続々とヒットしている今、またひとつ傑作が誕生した。それがこの韓国映画「シバジ」である。

監督のイム・グオンテックは1936年生まれ54歳。最初は商業映画を中心に手がけるが、のちに独自のスタイルを確立し、数々の名作を生み出す。彼の作品は感情を抑え、人間の内面を見据えるものが多いことなどから、「韓国の溝口健二」とも呼ばれる。主な日本上映作品としては、NHKで「族譜」(78)が放映され、'87年には林権澤特集と題し5日間にわたって彼の作品を上映。また昨年の東京国際映画祭でも新作「波羅羯語」(89)が上映され来日、日本でも馴染みのある韓国人監督の一人である。

また、主演のカン・スヨンは今年24歳という若さながら、本作品でリアルかつパワフルな演技を披露。そしてこのオンニョ役で、'87年度ヴェネツィア映画祭でアジア映画界では史上初の最優秀主演女優賞を獲得。イム・グオンテックとカン・スヨンは、韓国映画界のみならずアジア映画界を代表する名コンビである。

(上映時間:1時間33分)

12月14日(金)より「熱視線」ロードショー!

シネマスクエア
とうきゅう
新宿ミラノ座横3F (232)9274

連日 12:30 2:40 4:50 7:00

●毎金・土曜はレイトショー実施 PM9:10
●12月31日(月)は4:50の回で終了させていただきます。

特別鑑賞券¥1300均一発売中/
(当日¥1600均一の処)

全自由席定員制 ● 入替制

※満席および上映中の入場はできません。

